

エコたま グリーン NEWS



多摩市民環境会議機関紙 第 137 号(通巻第 197 号) 2014 年 11 月 6 日発行 発行人: 清水武志朗 編集人: 井上ひさかず 〒206-0025 多摩市永山 3-9 東永山複合施設 301(事務局員は常駐しておりません) e-mail qqh43tdd@train.ocn.ne.jp URL www.ecomeetingtama.jp

グリーンボランティア講演会

緑陰のすすめ—優しい気候変動適応策—



春、ヤマザクラなどに彩られる森林

上記タイトルのグリーンボランティア講演会が 11 月 3 日、パルテノン多摩で開かれ、会場の第一会議室は 80 人ほどの聴衆で埋まった。講師は森林総合研究所・気象環境研究領域チーム長の岡野通明氏。

氏は急速に温暖化が進む地球環境と、われわれの身近な問題をわかりやすく解説してくれた。それによると、熱中症や日焼けの問題もじつは地球環境問題だという。さっそく話の内容に触れてみよう。

平成 22 年の夏に熱中症が原因で死亡した人は 1718 名。このうち、家のなかで発症した人が 45.6%。とくに高齢者が多かった。この数字は交通事故と比較してもたいへんな数字だ。



明講師

30℃以上を記録する真夏日は年を追って増え、今後もその動きは止まらないだろう。都市部では、これに「ヒートアイランド現象」が加わる。有害な紫外線から地球上の生物を守ってくれるオゾン層も全量が減少する傾向にあり、この紫外線から岡野通

も身を守らねばならない。

ここで、森林、樹木のもつ多面的な機能を考えてみよう。それには気候緩和機能、物理環境改善機能、保健休養機能などがあり、木陰、日陰を利用することはこの多面的な機能の活用になる。根拠ある理由づけで、緑陰の気候緩和機能を評価し、暑熱シェルターや日傘代わりとして利用すべきだ。日陰には意味があり、動物の人もここで休む。

木漏れ日の中のボランティアたち



木陰の基本である 1 枚の葉っぱで考えてみると、太陽光が入射すると反射・散乱・吸収・透過の過程を経て、エネルギーが分散する。また、葉は水分を蒸散するため、森林の周辺に行くと

涼しい。(この効果により、新宿御苑の周辺では離れたところより夜は 2℃ほど低いという研究報告もある)

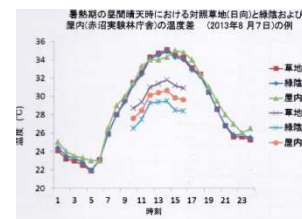
光環境としての木陰のおもしろさは、葉や群落の複雑な分光特性や透過特性を反映していること。平板な陰ではなく、透過光や散乱光に満ちている。密な群落を除けば、適度な明るさ、やわらかい光調をもち、紫外線の遮蔽性にも優れている。そして葉や群落に不均一性があるので、木陰の光環境も不均一であり、光斑(木漏れ日)が生まれるが、これにはセラピー効果があるといわれる。

さらに森林の特長としては、落葉樹では季節性の大きな変化がある。落葉期は日差しが差し込み、開葉期は日差しを遮る。雨滴の打撃力を弱め、霧粒を捕捉する。水分環境の変動を緩やかにする。直射日光を遮るとともに、水分の蒸散で自らを冷やすため、環境全体のクーラーの役目を果たす。冬の放射冷却を抑えて、寒さを緩和する、などがある。→測定機器



では、緑陰や木陰は本当に涼しいのか、計器を使って測ってみよう。この計器はたんなる気温計ではなく、湿度も交えて測る WBGT 湿球黒球温度計というものを使う。

これで測ってみると、緑陰とその前に広がる日なたの草地では、気温そのものは大した違いがなかったが、WBGT では緑陰が低いことがはっきりと記録された。たとえば夏の午後 2 時ごろ、日なたの気温が 34℃ 弱のところ緑陰では 31℃



これに屋内を加えた 3 条件の測定でも、緑陰が一番涼しく、屋内より屋外の緑地のほうが涼しいという結果になった。(次号につづく) 中央の上が日なた、中が屋内、下が緑陰 ↑

今年も青少協との合同清掃会 (大栗川)

多摩市青少年問題協議会第 1 地区が、毎年 11 月の第一日曜日に行っている大栗川清掃に、よみがえれ、大栗川を楽しむ会のメンバーらが合流して行う合同清掃が 11 月 2 日(日)の午前中に行われた。

場所はいつもの新大栗橋から交通公園までの河川敷内と側道周辺。今年は第一小学校の生徒より多摩中学校の生徒のほうが多く、従って保護者の姿はあまり見られなかった。ただ、多摩中学校の校長先生や第一小学校の副校長先生など、教育関係者も一緒に参加し、楽しむ会のメンバーを入れた参加総人数は約 120 人。

生徒たちはいつも





のように、市民清掃デー専用の袋を持ち、新大栗橋のすぐ

下流から大栗川におり、ごみを拾いにかかる。だが、すぐに真っ赤に錆びた鉄の棒や、こものような大きな敷物などを見つけ、処理に思案顔。手に持つ専用袋も、すぐに一杯になるほど多数のごみが河川敷に流れついており、目につくものをつぎからつぎへと収集。

楽しむ会の2人(滝口、佐藤=上写真)は流れのなかや対岸のほうまで場所を広げ、生徒らが清掃しきれない部分を担当した。

こうして午前10時からの1時間で450入りの袋で30袋(もちろん袋に入らないものもあり)ほどのごみが集められ、ふだん上から見ると目立たないごみが実際にはずいぶん河川敷内にあったことが明らかになった。ごみは多摩中のリヤカーで運ばれたが、1回で収集したごみは分別して運ぶ



は運びきれなかったほど。最後に中学校と小学校の代表者が一人ずつ感想を述べたが、どちらも「大栗川がきれいになってうれしかった。また機会があれば川の掃除をしたい」と話していた。

訂正: 本紙前号(136号)で多摩市の市制施行記念日の市民表彰で、大栗川を楽しむ会の相田幸一会長が個人で表彰を受けると報じましたが、正しくは「よみがえれ、大栗川を楽しむ会」の団体そのものに対する表彰でした。関係者にご迷惑をおかけしたことを深くおわびします。

日野市環境デーに出展



動物園の上り坂に8つのテントが

多摩市省エネ推進協議会では、10月25日(土)に多摩動物公園で行われた「日野市環境デー」に参加し、入場口からの上り坂右側に設けられたテントに出展した。当会議からは西、中瀬

の2名が参加。太陽光発電やLED球などの「省エネ」をアピールするもので、小さな太陽光パネルをつけたおもちゃの自動車や、背中にミニパネルをつけた虫型のおもちゃなどを用意して、来場者にアピールしていた。

会場にはトヨタや日産などの自動車ディーラーも出展し、燃料電池車やプラグインハイブリッド(PHV)車、電気自動車(EV)などの最新エコカーも展示されていた。

朝から抜けるような秋空となり、会場には小さな子どもを連れた家族連れがひっきりなしに来場。スタンプラリーもやっており、スタンプを求めるお客さんも多く、多摩市のテントへの



来場者は二百数十人だった。

とくに男の子は太陽光自動車に興味を持ち、いつまでも自動車を追いかけるなどして遊んでいた。虫型おもちゃは



PHVのプリウス(右)とクラウン太陽光で足だけが細かく動き、手の上に乗せられた若いお母さんが「キャーッ」と悲鳴をあげていた。

「生ごみ入れません!袋」配布終了

多摩市独自の施策で、生ごみの排出量を少しでも抑えようと、生ごみを堆肥などに自家処理する市民を増やすために、そのインセンティブ(動機づけ、ごほうび)として考え出されたのが「生ごみ入れません!袋」だ。たま



「入れません袋」の配付風景
ごみ会議が市に提案して3年前に実現した。

ごみをすでに自家処理している、あるいはこれから自家処理すると申し出た市民に、半年に1回、市から100入りの袋が20枚無料でもらえるという特典がある。

この袋は「燃やせるごみ」に出す際、紙系などのごみは入れて出せるが、生ごみは一切入れてはならない(自家処理しているはずなのだから)。緑色の透明タイプなので、生ごみが入っていたらすぐ発見されるし、収集員に回収されない。その人に与えられた番号も記入することになっているので、だれが出したかすぐわかる仕掛けだ。

ただし、この袋の配布が3年間のモデル事業として始まったことや、生ごみの自家処理をする人が市内で1200世帯に達し、一応、本来の目的が達せられたとの判断によって、この10~11月に各地で行われた配付が最後になった。この場では、配付を担当する生ごみリサイクルサポーターが受け取り者に「今後とも自家処理の継続を」と依頼していた。

残った緑の袋は、今後に行われる生ごみ処理の講習会などの参加者に配られる予定だ。

「太陽光全量売電」のマンション建設中

マンションの屋根全体に太陽光パネルを敷設して、発電した電気はすべて東京電力に売電し、その費用の分配で各戸の光熱費を安くするという、めずらしい試みのマンションが建設中だ。場所は市内馬引沢1丁目の元URリネージュの事務所があった場所。レーベン多摩永山ガーデンヒルズという。

説明員によると、発電量の数値は不明とのことだが、早期の売電契約だったので1kW時38.88円で売れ、買う電気の値段は同24円となるから、その差額で光熱費が約43%安くなるという仕組み。セールス上のモデルでは都市ガス使用の場合、月18130円ほどかかるが、このマンションのオール電化だと同10340円。差額が7790円となり、年間93480円も節約できるというのが売りだ。第1期の30戸分は即日完売だったとか。全78戸が来年3月完成予定。→完成予想図

